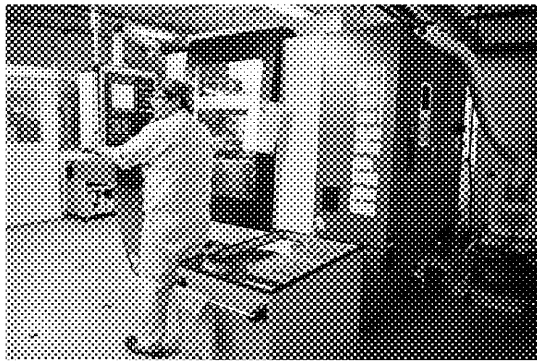


工程集約し高度化

早川精機 加工・検査に積極投資

【岐阜】早川精機工業（岐阜市、臼井洋社長）は、主力の精密治具・マシンゲージなどを生産する本社工場で、工作機械や検査装置の更新を加速する。従来は2億円前後だった年間の設備投資で、2025年1月期は3億円を投じたのに続き、26年1月期も3億4000万円を計画する。設備の暖気運転や試し加工、段取り時間などを減らし、工程集約や加工の高度化で生産性や付加価値を高める。人手不足に対応し、技能者の意欲向上にもつなげる。

26年1月期中に導入するの、5軸制御マシ



シニングセンターや複合加工機、デジタル

費用も削減する。

早川精機工業は自動車のエンジン関連部品などの加工に使う精密治具や航空機部品を手がける。多品種少量生産を育てる。

研削盤、検査装置など14台で、保有する設備の約1割に相当する。

高精度の加工品質を確保。最新の検査装置で顧客からの信頼も高まる。

▲早川精機工業が本社工場に導入したデジタル研削盤

工程集約などで設備のスペース効率も高め、当面の工場増設は予定していない。一方で旧式の設備は売却や廃棄し、保守の手間や

産で難易度の高い加工も多く、技能者一人ひとりがほぼ専用に近い工作機械を1、2台ずつ持ち、個々の製品を分担する。責任を持って治具や工具の選定から工作機械のプログラミングまで手がける。

設備更新は、より高難易度の加工技術を蓄積する狙い。主力

のエンジン関連製品の将来の需要が不透明な中、新規分野の需要を開拓し、将来の事業の柱を育てる。